彼女とは知りあいの結婚パーティーで顔を合わせ、仲良くなった。三年前のことだ。僕と彼女はひとまわり近く歳が離れていた。彼女は二十歳で、僕は三十一だった。でもそれはべつにたいした問題ではなかった。僕はちょうどその頃頭を悩まさなければならないことが他にいっぱいあったし、正直なところ歳のことなんていちいち考えている暇もなかった。彼女はそもそもの最初から歳のことなんて考えもしなかった。僕は結婚していたが、それも問題にならなかった。彼女は年齢とか家庭とか収入とかいったものは足のサイズや声の高低や爪の形なんかと同じで純粋に先天的なものだと思いこんでいるようだった。要するに考えてどうにかなるという種類のものではないのだ。そう言われてみれば、それはまあそうだ。

彼女はなんとかという有名な先生についてパントマイムの勉強をしながら、生活のために広告モデルの仕事をしていた。とはいっても彼女は面倒臭がって、エージェントからまわってくる仕事の話をしょっちゅう断っていたので、その収入は本当にささやかなものだった。収入の足りない部分は主に彼女の何人かのボーイ・フレンドたちの好意で補われているようだった。もちろんはっきりしたことはわからない。彼女のことばのはしばしから、たぶんそ

んな風なんじゃないかと想像してみただけだ。

とはいっても僕は、彼女がお金のために男と寝るとか、そういうことを言っているわけではない。たぶんもっと、ずっと単純なことなのだ。そしてそれがあまり単純すぎるので、いろんな人間が自分のふだん抱いているぼんやりとした感情をいくつかの明確な形に——たとえば「好意」とか「愛情」とか「あきらめ」とかいったものに——反射的に、自分でもよくわからないうちに、転換させてしまうのだ。うまく説明できないけれど、要するにそういうことだと思う。

もちろんそんな作用がいつまでもいつまでも続くというものではない。そんなものが永遠に続くとしたら、宇宙のしくみそのものがひっくりかえってしまう。それが起り得るのは、ある特定の場所で、ある特定の時期だけだ。それは「蜜柑むき」と同じことなのだ。

最初に知りあった時、彼女は僕にパントマイムの勉強をしているの、と言った。

へえ、と僕は言った。たいしてびっくりもしなかった。最近の若い女の子はみんな何かをやっている。それに彼女は何かに真剣に打ちこんで才能を磨いていくといったタイプには見えなかった。

それから彼女は「蜜柑むき」をやった。「蜜柑むき」というのは文字どおり蜜柑をむくわけである。彼女の左側に蜜柑が山もりいっぱい入ったガラスの鉢があり、右側に皮を入れる鉢がある——という設定である——本当は何もない。彼女はその想像上の蜜柑をひとつ手にとって、ゆっくりと皮をむき、ひと房ずつ口にふくんでかすをはきだし、ひとつぶんを食べ終えるとかすをまとめて皮でくるんで右手の鉢に入れる。その動作を延々と繰り返すわけである。言葉で説明すると、これはべつにたいしたことではない。しかし実際に目の前で十分も二十分もそれを眺めていると——僕と彼女はバーのカウンターで世間話をしていて、彼女は話しながら殆んど無意識にその「蜜柑むき」をつづけていた——だんだん僕のまわりから現実感が吸いとられていくような気がしてくるのだ。これはすごく変な気持だ。昔アイヒマンがイスラエルの法廷で裁判にかけられた時、密室にとじこめて少しずつ空気を抜いていくらないけれど、僕はふとそのことを思い出した。

「君にはどうも才能があるようだな」と僕は言った。

「あら、こんなの簡単よ。才能でもなんでもないのよ。要するにね、そこに蜜柑があると思いこむんじゃなくて、そこに蜜柑がないことを忘れればいいのよ。それだけ」

「まるで禅だね」

僕はそれで彼女が気にいった。

僕と彼女はそれほどしょっちゅう会っていたわけではない。だいたい月に一回、多くて二回くらいのものだった。我々は食事をしてからバーに行ったり、ジャズ・クラブに行ったり、夜の散歩をしたりした。

彼女と二人でいると、僕はとてものんびりとした気持になることができた。やりたくもない仕事のことや、結論の出しようもないつまらないごたごたや、わけのわからない人間が抱くわけのわからない思想のことなんかをさっぱりと忘れ去ることができた。彼女にはなにかしらそういう能力があった。彼女の話す言葉の殆んどには百パーセント意味なんてなかったけれど、それに耳を傾けていると、遠くを流れる雲を眺めている時のように、ひどくぼんやりとして心地良かった。

僕もいろいろと話をしたけれど、たいしたことは何ひとつ話さなかった。話すべきことはべつに何もなかった。

本当にそうなのだ。

話すべきことなんて何もないのだ。

二年前の春に、彼女の父親が心臓病で死んで、少しまとまった額の現金が彼女のものになった。少くとも彼女の話によればそういうことだった。彼女はその金でしばらく北アフリカに行きたいと言った。どうして北アフリカなのかはよくわからなかったけれど、ちょうど僕は東京のアルジェリア大使館に勤めている女の子を知っていたので、彼女に紹介した。それで彼女はアルジェリアに行った。なりゆき上、僕が空港まで見送りに行った。彼女は着がえを詰めこんだみすぼらしいボストン・バッグをひとつさげているきりだった。彼女ははたから見ると北アフリカに行くというよりは、北アフリカに帰っていくという感じで荷物チェックをうけていた。

「本当に日本に帰ってくるんだろうね？」と僕は訊ねてみた。

「もちろん帰ってくるわよ」と彼女は言った。

三ヵ月後に彼女は日本に帰ってきた。出かけた時よりも三キロやせて、まっ黒に日焼けしていた。そして新しい恋人をつれていた。二人はアルジェのレストランで知りあったそうだった。アルジェリアにいる日本人の数は少いから、二人はすぐに仲良くなり、恋人になった。

僕の知る限りでは、彼女にとっては彼が最初の、きちんとした形の恋人だった。

彼は二十代後半で、背が高く、いつもきちんとした身なりをして、丁寧な言葉づかいをした。幾分表情には乏しいが、まあハンサムな部類に属するし、感じも悪くなかった。手が大きく、指は長い。

「じゃあ、そうなんでしょ。でも……よくわかんないのよ。だってべつに働いているようにも見えないんだもの。よく人に会ったり電話をかけたりはしてるみたいだけど、とくに必死になっているって風でもないし」
「まるでギャツビイだね」
「なあに、それ？」
「なんでもないよ」と僕は言った。

＊

十月の日曜日の午後に、彼女から電話がかかってきた。妻は朝から親戚の家にでかけていて、僕は一人だった。よく晴れた気持の良い日曜日で、僕は庭のくすの木を眺めながらりんごを食べていた。僕はその日だけでもう七個もりんごを食べていた。
「今、おたくのわりと近くにいるんだけれど、これから二人で遊びにうかがっていいかしら？」と彼女は言った。
「二人？」と僕はききかえした。
「私と彼よ」と彼女は言った。
「いいよ、もちろん」と僕は言った。

「じゃあ、あと三十分で行くわ」と彼女は言った。そして電話は切れた。
僕はソファーの上でしばらくぼんやりしてから浴室に行ってシャワーを浴び、髭を剃った。そして体を乾かしながら耳の掃除をした。部屋をかたづけようかどうしようか迷ったが、結局あきらめた。全部をきちんとかたづけるには時間が不足していたし、全部をきちんとかた紙やらレコードやら鉛筆やらセーターなんかがいっぱいにちらばっていたけれど、とりたてて不潔な感じはしなかった。仕事をひとつ終えたばかりで何をする気にもなれない。僕はソファーに腰を下ろして、くすの木を見ながらもう一個りんごを食べた。
彼らは二時過ぎにやってきた。家の前でスポーツ・カーの停まる音が聞こえた。玄関に出てみると見覚えのある銀色のスポーツ・カーが道路に停まっていた。僕のガール・フレンドが窓から顔を出して手を振っていた。僕は車を裏庭の駐車スペースに案内した。
「来たわよ」とにこにこしながら彼女が言った。彼女は乳首の形がくっきりと見えるくらい薄いシャツを着て、オリーブ・グリーンのミニ・スカートをはいていた。
彼はヨーロッパ・タイプのネイビー・ブルーのブレザー・コートを着ていた。以前会った時と少し印象が違うような気がしたが、それは少くとも二日間はのばした不精髭のせいだった。不精髭とはいっても、彼の場合にはだらしない雰囲気はまるでなく、少しだけ翳が濃く

なったといった感じだった。彼は手に持ったポロのサングラスを胸のポケットに仕舞い、小さく鼻を鳴らした。すごく上品な鼻の鳴らし方だった。

「どうもお休みのところを突然お邪魔しちゃって申しわけありません」と彼は言った。

「いや、べつに構わないよ。毎日が休みみたいなものだし、それに一人で退屈していたところだから」と僕は言った。

「ごはん持ってきたわよ」と彼女が言って後部座席から白い大きな紙袋をとり出した。

「ごはん？」

「たいしたものじゃないんです。ただ日曜日に急にうかがうわけだし、何か食べるものをお持ちした方がいいんじゃないかと思ったものですから」と彼が言った。

「それはありがたいな。なにしろ朝からりんごしか食べてないんだ」

我々は家の中に入って、テーブルの上に食料品を広げた。なかなか立派な品揃えだった。質の良い白ワインとロースト・ビーフ・サンドウィッチとサラダとスモーク・サーモンとブルーベリー・アイスクリーム、量もたっぷりある。ロースト・ビーフのサンドウィッチにはちゃんとクレソンも入っていた。辛子も本物だった。料理を皿に移しかえてワインの栓を抜くと、ちょっとしたパーティーみたいになった。

「かえって気を使わせて悪かったね」と僕は彼に言った。

「いえ、いいんです。こちらが勝手に押しかけちゃったわけですから」

「食べちゃいましょうよ。すごくおなか減ったわ」と彼女が言った。

僕がいちおうホストとしてそれぞれのグラスにワインを注いだ。それから乾杯した。ちょっと癖のあるワインだったけれど、飲んでいるうちにその癖が体になじんだ。

「何かレコードかけていい？」と彼女が言った。

「いいよ」と僕は言った。

彼女は前にも一度うちに遊びに来たことがあるから、説明しなくてもいろんな勝手はわかっている。レコード棚から好きなLPを何枚か出してほこりを払い、オート・チェンジャーの上にかさねていった。

「ずいぶんなつかしいプレイヤーですね」と彼は言った。ガラードのオート・チェンジャーのことだ。たしかにオート・チェンジャーはすっかり時代遅れになってしまった。僕も程度の良いフル・オート・チェンジのガラードを手に入れるにあたっては結構苦労したのだ。そういうことをわかってもらえるのは嬉しい。それからしばらくオーディオの話になった。

彼女は古いジャズ・ヴォーカルが好きだったので、フレッド・アステアとかビング・クロスビーとかのレコードがかかった。まんなかでチャイコフスキーの「弦楽セレナーデ」がか

かって、それからまたナット・コールになった。

我々はサンドウィッチをかじり、サラダを食べ、スモーク・サーモンをつまんだ。ワインがからになってしまうと、あとは冷蔵庫から缶ビールを出して飲んだ。うちの冷蔵庫には缶ビールだけはいつもぎっしりつまっている。友だちが小さな会社をやっていて、あまった贈答用のビール券を安くわけてくれるからだ。

彼はどれだけ飲んでも顔色ひとつ変えなかった。僕もビールならかなり飲める。彼女もつきあって何本か飲んだ。結局一時間足らずのあいだにビールの空き缶が二十四個机の上に並んだ。ちょっとしたものだ。レコードが終り、彼女がまたLPを五枚選んだ。最初の曲はマイルス・デイヴィスの「エアジン」だった。

「グラスがあるんだけど、よかったら吸いませんか？」と彼が言った。

僕はちょっと迷った。というのは、僕は一ヵ月前に禁煙したばかりでとても微妙な時期だったし、ここでマリファナを吸うことがそれにどう作用するのかよくわからなかったからだった。でも結局吸うことにした。彼は紙袋の底からアルミ・フォイルをとりだし、葉を巻紙の上にのせてくるりと巻き、のりの部分を舌でなめた。ライターで火をつけ、そして何度か吸いこんで火がきちんとついていることをたしかめてから僕にまわした。とても質の良いマリファナだった。我々はしばらくのあいだ何も言わずにそれを一口ずつ吸っては順番にまわ

した。マイルス・デイヴィスが終って、ヨハン・シュトラウスのワルツ集になった。

一本吸い終った時、彼女が眠いと言った。寝不足のうえにビールを三本飲んで大麻煙草を吸ったせいだった。彼女はほんとうにすぐに眠くなるのだ。僕は彼女を二階につれていって、ベッドに寝かせた。彼女はTシャツを貸してほしいと言った。僕がTシャツをわたすと、彼女はするすると服を脱いでパンティーだけになり、上からTシャツをかぶってベッドにもぐりこみ、その五秒後にはもう寝息をたてていた。僕は頭を振って下におりた。

応接間では彼女の恋人が二本めの大麻煙草を巻いていた。タフな男だ。僕もどちらかといえば彼女のわきにもぐりこんで、ぐっすりと眠りこんでしまいたかった。でもなかなかそうもいかない。我々は二本めのマリファナを吸った。まだヨハン・シュトラウスのワルツがつづいていた。僕はどういうわけか小学校の学芸会でやった芝居のことを思いだした。僕はそこで手袋屋のおじさんの役をやった。子狐が買いにくる手袋屋のおじさんの役だ。でも子狐の持ってきたお金では手袋は買えない。

「それじゃ手袋は買えないねえ」と僕は言う。ちょっとした悪役なのだ。

「でもお母さんがすごく寒がってるんです。あかぎれもできてるんです」と子狐は言う。

「いや、駄目だね。お金をためて出なおしておいで。そうすれば

「時々納屋を焼くんです」

と彼が言った。

「失礼？」と僕は言った。ちょっとぼんやりしていたもので、聞きまちがえたような気がしたのだ。

「時々納屋を焼くんです」と彼は繰り返した。

僕は彼の方を見た。彼は指の爪先でライターの模様をなぞっていた。それから大麻の煙を思いきり肺の奥に吸いこんで十秒ばかりキープして、そしてゆっくりと吐きだした。まるでエクトプラズムみたいに、煙が彼の口から空中へと漂った。彼は僕にマリファナをまわした。

「なかなかものが良いでしょ」と彼は言った。

僕は肯いた。

「インドから持ってきたんです。とくに質の良いものだけを選んだんです。これを吸っていると不思議にいろんなことを思いだすんです。それも光とか匂いとか、そんなことです。記憶の質が……」彼はそこでゆっくり間を置いて何度か指を鳴らした。「まるで変っちゃうんです。そう思いませんか？」

そう思う、と僕は言った。僕もちょうど学芸会の舞台のざわめきとか背景のボール紙に塗られた絵の具の匂いとかを思いだしているところだった。

「納屋の話を聞きたいね」と僕は言った。

彼は僕の顔を見た。彼の顔にはあいかわらず表情らしいものがなかった。

「話していいんですか？」と彼は言った。

「もちろん」と僕は言った。

「簡単な話なんです。ガソリンをまいて、火のついたマッチを放るんです。ぼっといって、それでおしまいです。焼けおちるのに十五分もかかりゃしませんね」

「それで」と言ってから、僕は口をつぐんだ。次のことばがうまくみつからなかったからだ。

「どうして納屋なんて焼くわけ？」

「変ですか？」

「わからないな。君は納屋を焼くし、僕は納屋を焼かない。そのあいだにははっきりとした違いがあるし、僕としてはどちらが変かというよりは、まず違いをはっきりさせておきたいんだ。お互いのためにね。それに、納屋の話は君が先に持ち出したんだよ」

「そうですね」と彼は言った。「たしかにそのとおりだ。ところでラビ・シャンカールのレコードはお持ちですか？」

ない、と僕は言った。

彼はしばらくぼんやりしていた。

「二ヵ月にひとつくらいは納屋を焼きます」と彼は言った。そしてまた指を鳴らした。「そ

れくらいのペースがいちばん良いような気がするんです。もちろん僕にとっては、ということですが」

僕は曖昧に肯いた。ペース？

「ところで君は自分の納屋を焼くわけ？」と僕は訊ねてみた。

彼は理解しかねるといった目つきで僕の顔を見た。「どうして僕が自分の納屋を焼かなくちゃいけないんですか？　どうして僕がそんなにいくつも納屋を持っているなんて思うんですか？」

「ということは」と僕は言った。「他人の納屋を焼くわけだよね？」

「そうです」と彼は言った。「もちろんそうです。だから要するに、犯罪行為です。あなたと僕が今こうして大麻煙草を吸っているのと同じように、はっきりとした犯罪行為です」

僕は椅子の手すりにひじをついたまま黙っていた。

「他人の納屋に無断で火をつけるわけです。もちろん大きな火事にならないようなものを選びます。だって僕は火事をおこしたいわけじゃなくて、納屋を焼きたいだけですからね」

僕は肯いて、短くなった大麻煙草をもみ消した。「でも、つかまると問題になるよ。なにしろ放火だから下手すると実刑をくらうかもしれないな」

「つかまりゃしませんよ」と彼はこともなげに言った。「ガソリンをかけて、マッチをすって、すぐに逃げるんです。それで遠くから双眼鏡でのんびり眺めるんです。つかまりゃしません。だいいちちっぽけな納屋がひとつ焼けたくらいじゃ警察もそんなに動きませんからね」

「それに外車に乗った身なりの良い若い男がまさか納屋を焼いてまわってるなんて誰も思わないものね」

彼はにっこりと笑った。「そのとおりです」

「それで彼女はそのことを知ってるの？」

「彼女は何も知りません。そんなの、誰にしゃべったこともないんです」

「どうして僕にしゃべるの？」

彼は左手の指をまっすぐにのばして、それで自分の頬をこすった。伸びた髭がかすかな音を立てた。「あなたは小説を書いている人だし、人間の行動のパターンのようなものについてくわしいんじゃないかと思ったんです。それに僕はつまり、小説家というものは物事に判断を下す以前にその物事をあるがままに楽しめる人じゃないかと思っていたんです。だから話したんです」

僕は彼の言ったことについてしばらく考えてみた。理屈としてはあっていた。

「君はたぶん一流の作家のことを話してるんだと思う」と僕は言った。

彼はおかしそうに笑った。「こういう言い方は変かもしれないけれど」

彼は顔の前で両手を広げ、それからぱたんとあわせる。「世の中にはいっぱい納屋があって、それらがみんな僕に焼かれるのを待っているような気がするんです。海辺にぽつんと建った納屋やら、たんぼのまん中に建った納屋やら……とにかく、いろんな納屋です。十五分もあれば綺麗に燃えつきちゃうんです。まるでそもそもの最初からそんなもの存在もしなかったみたいにね。誰も悲しみゃしません。ただ——消えちゃうんです。ぷつんってね」

「でもそれが不必要なものかどうか、君が判断するんだね」

「僕は判断なんかしません。観察しているだけです。雨と同じですよ。雨が降る。川があふれる。何かが押し流される。雨が何かを判断していますか？　いいですか、僕はモラリティーというものを信じています。モラリティーなしに人間は存在できません。僕はモラリティーというのは同時存在のことじゃないかと思うんです」

「同時存在？」

「つまり僕がここにいて、僕があそこにいる。僕は東京にいて、僕は同時にチュニスにいる。責めるのが僕であり、ゆるすのが僕です。それ以外に何がありますか？」

ぱちん。

「少し極端な意見じゃないかって気がするな」と僕は言った。「そういうのは結局仮説の上

に成立しているわけだからね。厳密に言えば同時という概念ひとつとりあげてもあやふやなものだよ」

「わかっています。僕はただ自分の気持を気持として表現しただけです。でももうやめましょう。僕はふだん無口なぶん、グラスをやるとしゃべりすぎるんです」

「ビールは飲む？」

「どうもありがとう。いただきます」

僕は台所から缶ビールを六本、カマンベール・チーズといっしょに持ってきた。我々はビールを三本ずつ飲んで、チーズを食べた。

「この前に納屋を焼いたのはいつ？」と僕は訊ねてみた。

「そうですねえ」、彼は空になったビール缶を軽く握ったまま少し考えこんだ。「夏、八月の終りですね」

「この次はいつ焼くことになっているの？」

「わかりませんね。べつにスケジュールをくんでカレンダーにしるしをつけて待ってるわけじゃありませんからね。気がむいたら焼きにいくんです」

「でも焼きたいと思った時にちょうど都合よく適当な納屋があるってものでもないでしょう？」

「もちろんそうです」と彼は静かに言った。「ですから、あらかじめ焼くのに適したものを選んでおくわけです」
「ストックしておくわけだね」
「そういうことです」
「もうひとつだけ質問していいかな？」
「どうぞ」
「次に焼く納屋はもう決まっているのかな？」
彼は目と目のあいだにしわを寄せた。それからすうっという音を立てて、鼻から息を吸いこんだ。「そうですね。決まっています」
僕は何も言わずにビールの残りをちびちびと飲んだ。
「とても良い納屋です。久し振りに焼きがいのある納屋です。実は今日も、その下調べに来たんです」
「ということは、それはこの近くにあるんだね」
「すぐ近くです」と彼は言った。
それで納屋の話は終った。
五時になると彼は恋人を起こし、僕の家を突然訪問したわびを言った。彼はビールを二十

本近く飲んだにもかかわらず、完全に素面だった。彼は裏庭からスポーツ・カーを出した。
「納屋のことは気をつけとくよ」と別れぎわに僕は言った。
「そうですね」と彼は言った。「とにかく、すぐ近くです」
「納屋ってなあに？」と彼女が言った。
「男どうしの話さ」と彼が言った。
「やれやれ」と彼女が言った。
そして二人は消えた。
僕は応接室に戻り、ソファーに寝転んだ。テーブルの上にはありとあらゆるものが散乱していた。僕は床に落ちていたダッフル・コートをとって頭からかぶり、ぐっすりと眠った。目がさめると部屋はまっ暗だった。
七時。
青っぽい闇と大麻煙草のつんとする匂いが、部屋を覆っていた。妙に不均一な暗さだった。僕はソファーに寝転んだまま、学芸会の芝居のつづきを思いだそうとしてみたが、もううまく思い出せなかった。子狐は手袋を手に入れることができたんだっけ？
僕はソファーから起きあがり、窓を開けて部屋の空気を入れかえ、それから台所でコーヒーを沸かして飲んだ。

*

僕は次の日、本屋に行って、僕の住んでいる町の地図を買ってきた。細かい通りまでいる二万分の一の白地図だ。僕はその地図を持ってうちのまわりを歩きまわり、納屋のある地点に鉛筆で×印をつけた。三日かけて四キロ四方をくまなく歩いた。僕の家は郊外にあり、まわりには農家がまだ数多く残っている。したがって納屋の数も結構多い。全部で十六の納屋があった。

彼の焼こうとしている納屋はたぶんそのうちのどれかのはずだった。「すぐ近く」と言った時の彼の口ぶりからして、それ以上うちから離れてはいないだろうと僕は確信していた。

それから僕は十六の納屋の状態のひとつひとつを丁寧にチェックした。まず人家に近すぎたり、ビニール・ハウスのわきにあったりする納屋は除外した。それから農具やら農薬なんかが入っていて、かなり活発に利用されているものも除外した。彼は決して農具や農薬なんかは焼きたがらないだろうという気がしたからだ。

結局五つの納屋が残った。五つの焼くべき納屋だ。あるいは五つの燃えて差支えない納屋だ。十五分くらいで燃え落ちて、そして燃え落ちたことについて、たぶん誰も残念に思わないだろうという類いの納屋だ。彼がそのうちのどれを焼こうとしているのかは僕には決めか

ねた。あとはもう好みの問題だからだ。僕としては彼がその五つの納屋のうちのどれを選んだのかがひどく知りたかった。

僕は地図を広げ、五つの納屋を残してあとの×印を消した。それから直角定規と曲線定規とディバイダーを用意し、うちを出てその五つの納屋を巡り、また家に戻ってくる最短コースを設定した。道が川や丘陵に沿ってくねくねと曲っていたせいで、その作業はかなり手間どった。結局コースの距離は七・二キロ、何度も測ってみたから誤差はほとんどないはずだ。

翌朝の六時、僕はトレーニング・ウェアにジョギング・シューズをはいて、そのコースを走ってみた。僕は毎日朝と夕方に六キロずつのコースを走っているから、一キロずつ距離を増やすのはそれほどの苦痛ではない。風景も悪くないし、途中に踏切がふたつあるものの、それにひっかかることはまれだった。

まず家を出て近くの大学のグラウンドをぐるりとまわり、それから川に沿って人気のない未舗装道路を三キロ走る。途中に最初の納屋がある。それから林を抜ける。軽い上り坂だ。また納屋がある。少し先に競馬用の馬小屋があるから馬たちが火を見て少しは騒ぐかもしれない。でもそれだけだ。実害はない。

三つめの納屋と四つめの納屋は年老いた醜い双子みたいによく似ている。距離も二百メートルと離れてはいない。どちらも古くて、汚ない。もし焼くとしたら、両方一緒に焼いちゃ

ってもいい。

最後の納屋は踏切のわきに建っていた。約六キロの地点だ。まったく完全に打ち捨てられた納屋だ。線路に面してペプシ・コーラのブリキの看板が打ちつけられている。建物は――そんなものを建物と呼ぶべきかどうか僕には自信がないけれど――ほとんど崩れかけていた。それはたしかに、彼が言うように、誰かに焼かれるのをじっと待っているように見えた。

僕は最後の納屋の前で少し立ちどまって何度か深呼吸してから踏切を越え、家に戻った。三十一分三十秒。まずまずだ。そして僕はシャワーを浴びて朝食を食べた。それから仕事にかかる前にくすの木を眺めながらレコードを一枚聴いた。

一ヵ月間、そんな風に僕は毎朝同じコースを走りつづけた。しかし、納屋は焼けなかった。

時々僕は彼が僕に納屋を焼かせようとしているんじゃないかと思うことがあった。つまり納屋を焼くというイメージを僕の頭の中に送りこんでおいてから、自転車のタイヤに空気を入れるみたいにそれをどんどんふくらませていくわけだ。たしかに僕は時々、彼が焼くのをじっと待っているくらいなら、いっそのこと自分でマッチをすって焼いてしまった方が話が早いんじゃないかと思うこともあった。だってそれはただの古ぼけた納屋なのだから。

しかしそれはやはり考えすぎだ。実際問題として、僕は納屋を焼いたりはしない。納屋を焼くのは彼なのだ。たぶん彼は焼くべき納屋を変更したのだろう。あるいは忙しすぎて納屋

を焼く時間をみつけることができないのかもしれない。彼女からの連絡もまるでなかった。

十二月がやってきて、秋が終り、朝の空気が肌を刺すようになった。納屋はそのままだった。白い霜が納屋の屋根におりた。冬の鳥たちが凍てついた林の中でばたばたという大きな羽音をひびかせた。世界は変ることなく動きつづけていた。

＊

その次に僕が彼に会ったのは、昨年の十二月のなかばだった。クリスマスの少し前だった。どこに行ってもクリスマス・ソングがかかっていた。僕はいろんな人にいろんなクリスマス・プレゼントを買うために街を歩いていた。妻のためにグレーのアルパカのセーターを買い、いとこのためにウィリー・ネルソンがクリスマス・ソングを唄っているカセット・テープを買い、妹の子供のために絵本を買い、ガール・フレンドのために鹿の形をした鉛筆けずりを買い、僕自身のために緑色のスポーツ・シャツを買った。右手にそんな紙包みをかかえ、左手をダッフル・コートのポケットにつっこんで、乃木坂のあたりを歩いている時に、僕は彼の車をみつけた。まちがいなく彼の銀色のスポーツ・カーだった。品川ナンバーで、左のヘッド・ライトのわきに小さな傷がついている。車は喫茶店の駐車場に停まっていた。僕はためらわずに店の中に入った。

店の中は暗く、強いコーヒーの匂いがした。人の話し声もあまりきこえず、バロック音楽が静かに流れていた。僕は席を探すふりをして、彼の姿を探した。彼はすぐにみつかった。窓際に一人で座って、カフェ・オ・レを飲んでいた。店の中は眼鏡がまっ白になるくらい暑かったにもかかわらず、彼は黒いカシミアのコートを着たままだった。マフラーもとっていなかった。

僕は少し迷ったが、やはり声をかけることにした。ただ表で彼の車を見かけたことは言わなかった。僕はあくまで偶然この店に入って、偶然彼の姿をみつけたのだ。

「座ってもかまいませんか?」と僕は訊ねた。

「もちろんです。どうぞ」と彼は言った。

それから我々は軽い世間話をした。話はあまりはずまなかった。もともとあまり共通の話題がない上に、彼は何かべつのことを考えているように見えたからだ。しかし、かといって僕と同席することが迷惑という風でもなかった。彼はチュニジアの港の話をした。それからそこでとれる海老のことも話した。べつに義理で話しているというのではなく、真剣に海老の話をした。しかし話は途中で終ったまま、先がつづかなかった。

彼は手をあげて、二杯めのカフェ・オ・レを注文した。

「ところで、納屋のことはどうなったの?」と僕は思い切って訊ねてみた。

彼は唇のはしで微かにほほえんだ。「納屋ですか?　もちろん焼きましたよ。きれいに焼きました。約束したとおりね」

「家のすぐ近くで?」

「そうです。ほんとうのすぐ近くで」

「いつ?」

「この前、おたくにうかがってから十日ばかりあとです」

僕は地図に納屋の位置を描きこんで一日に二回その前をランニングしてまわった話をした。

「だから見落とすはずはないんだけれどね」と僕は言った。

「ずいぶん綿密なんですね」と彼は楽しそうに言った。「綿密で理論的です。でもきっと見落としたんですよ。そういうことってあるんです。あまりにも近すぎて、それで見落としちゃうんです」

「よくわからないな」

彼はネクタイをしめなおし、それから腕時計を見た。「近すぎるんですよ」と彼は言った。「でも、もう行かなくちゃいけないんです。それについては、この次ゆっくり話すことにしませんか?　申しわけないけれど、人を待たせているものですから」

それ以上彼をひきとめる理由はなかった。彼は立ちあがって、煙草とライターをポケット

に入れた。

「ところであれから彼女にお会いになりました？」と彼が訊ねた。

「いや、会ってないな。あなたは？」

「僕も会ってないんです。連絡がとれないんです。アパートの部屋にもいないし、電話も通じないし、パントマイムのクラスにもずっと出てないんです」

「どこかにふらっとでかけちゃったんじゃないかな。これまでにも何度かそういうことはあったからね」

彼はポケットに両手をつっこんで立ったまま、テーブルの上をじっと眺めた。「一文なしで、一ヵ月半もですか？　それも十二月ですよ」

わからない、と僕は言った。

彼はコートのポケットの中で何度か指を鳴らした。

「僕はよく知っているんだけれど、彼女はまったくの一文なしです。友だちもいません。住所録はぎっしりいっぱいだけど、あの子には友だちなんていないんです。いや、でもあなたのことは信頼してましたよ。お世辞じゃなくてね」

彼はもう一度時計を見た。「もう行きます。どこかでまた会いましょう」

「さよなら」と僕も言った。

＊

僕はそれから何度も彼女に電話をかけてみたのだけれど、電話は電話局で止められたままだった。僕は心配になって、彼女のアパートまで行ってみた。彼女の部屋は閉まったままだった。管理人はどこにもいなかったので、彼女がまだそこに住んでいるかどうかさえわからなかった。僕は手帳のページを破って「連絡してほしい」というメモを作り、名前を書いて、郵便受けの中に放り込んでおいた。連絡はなかった。

その次に僕がそのアパートを訪れた時には、ドアには別の住人の札がかかっていた。ノックしてみたが、誰も出てこなかった。相変らず管理人はみつからなかった。

それで僕はあきらめた。一年近く前の話だ。

彼女は消えてしまったのだ。

＊

僕はまだ毎朝、五つの納屋の前を走っている。うちのまわりの納屋はいまだにひとつも焼け落ちてはいない。どこかで納屋が焼けたという話もきかない。また十二月が来て、冬の鳥が頭上をよぎっていく。そして僕は歳をとりつづけていく。

夜の暗闇（くらやみ）の中で、僕は時折、焼け落ちていく納屋のことを考える。

踊る小人

どうしてその男のことをそんなにくわしく知っているかというと、僕が空港まで二人を出迎えに行ったからだ。突然ベイルートから電報が届いて、そこにはただ日付けとフライト・ナンバーだけが書いてあった。空港に来てほしいということらしかった。飛行機が着くと――飛行機は悪天候のために実に四時間も遅れて、そのあいだ僕はコーヒー・ルームでフォークナーの短篇集を読んでいた――二人が腕を組んでゲートから出てきた。二人は感じの良い若夫婦みたいに見えた。彼女が僕に男を紹介した。我々は殆んど反射的に握手をした。外国で長く暮していた人がよくやるようなしっかりとした握手だった。それから我々はレストランに入った。彼女はどうしても天丼が食べたいと言って天丼を食べ、僕と彼は生ビールを飲んだ。

貿易の仕事をしているんです、と彼は言った。しかし仕事の内容についてはそれ以上何も言わなかった。あまり自分の仕事の話をしたくないのか、それとも僕が退屈すると思って遠慮してしゃべらないのか、そのへんのところがよくわからなかった。でも僕の方もとくに貿易の話が聞きたいわけではないので、あえて質問はしなかった。話すことがないので、ベイルートの治安状態やチュニスの上水道の話をした。彼は北アフリカから中東にかけての状勢にはかなりくわしいようだった。

天丼を食べ終えてしまうと、彼女は大きなあくびをして、眠いと言った。そのまま眠りこ

んでしまいそうな感じだった。言い忘れたけれど、所かまわず眠くなるのが彼女の癖だ。彼がタクシーで家まで送ると言った。僕は電車の方が早いから電車で帰ると言った。なんのためにわざわざ空港まで来たのか、わけがわからなかった。

「お会いできて嬉しかったです」と彼は僕に向って申しわけなさそうに言った。

「こちらこそ」と僕も言った。

僕はそれから何回か彼と顔をあわせることになった。僕がどこかで偶然彼女に会ったりすると、そのわきには必ず彼がいた。僕が彼女とデートすると、待ちあわせの場所まで彼が車で送ってきたりすることもあった。彼はしみひとつない銀色のドイツ製のスポーツ・カーに乗っていた。僕は車のことは殆んど何も知らないので詳しい説明はできないけれど、なんだかフェデリコ・フェリーニの白黒映画に出てきそうな感じの車だった。

「きっとすごくお金持なんだね」と僕は一度彼女に訊ねてみた。

「そうね」と彼女はあまり興味なさそうに言った。「きっとそうなんでしょうね」

「貿易の仕事ってそんなにもうかるのかな？」

「貿易の仕事？」

「彼がそう言ってたよ。貿易の仕事をしてるんだってさ」